

アフィン対称空間上の pseudo-laplacian の大域的可解性について

広大

木幡嵩孝

田中 誠

§0 Introduction

C^∞ -多様体 M 上の微分作用素 P , M 上の C^∞ -関数 φ を与えたとき, 微分方程式

$$(*) \quad P\mu = \varphi$$

を考える。微分方程式 (*) の C^∞ -解の存在を論じる問題は色々な人達によって研究されてきた。1972年には A. Céréjo と F. Rouvière が論文 [1] の中で " M を複素連結半単純リーベ群とし, P を M 上のカシミール作用素としたとき, 微分方程式 (*) の大域的 C^∞ -解の存在を証明した。又同論文の中で複素カシミールの虚数部分を P としたときは微分方程式 (*) は必ずしも大域的解をもつとは限らないことを示した。1973年には S. Helgason が論文 [2] の中で " M を非有界対称空間 G/K とし, P を M 上の零でない G -不変な微分

(1)

作用素のとき微分方程式(*)の大域的 C^∞ -解の存在を証明した。

J. Rauch と D. Wigner は 1976 年に論文 [4] で "A. Céréjo と F. Rouvière の結果を更に M を中心の有限な非有理半单純リーベー群とし, P を M のカシミール作用素の場合に拡張したが", その論文の中で微分方程式(*)が大域的 C^∞ -解をもつための十分条件を次のように与えた。

(1) 微分作用素 P は real symbol P_m をもつ $\tau P = P$

をみたす。

(2) P の principal symbol から定義される Hamiltonian vector field の積分曲線を考える。 $P_m(x_0, \xi_0) = 0$ ($\xi_0 \neq 0$) となる実 (x_0, ξ_0) を通る $T^*(M)$ の積分曲線を M 上に Projection したとき, M の compact をところにあちていなければ。

(3) $u \in C^\infty(M)', Pu = 0 \Rightarrow u = 0$

(4) $M \supset \forall P: \text{compact}$ に対し次の条件をみたす $M \supset \widehat{P}$: compact が存在する。

(i) $P \subset \text{Int } \widehat{P}$

(ii) $u \in C^\infty(M)', \text{supp } Pu \subset P \Rightarrow \text{supp } u \subset \widehat{P}$

さて G をリーベー群とし σ を G の involutive automorphism とし, G_σ を σ の fix element 全体の作る G の部分群とする。

<2>

$(G_0)_0 \subset H \subset G_0$ とある G の閉部分群 H に対し、等質空間 G/H をアフィン対称空間と呼ぶ。特に σ を G の Cartan involution とすれば " G/H は対称空間となる"。又 $G \times G$ の involution を $\sigma(x, y) = (y, x)$ で定義すれば " $(G \times G)_0 = \Delta G$ " となり、

$G \times G / \Delta G \ni (g_1, g_2) \Delta G \longmapsto g_1 g_2^{-1} \in G$
 は C^∞ -同型対応となるが、この対応によつてリーベー群 G はアフィン対称空間の特別の場合とみなすことができる。

そこで我々は S. Helgason の結果並びに J. Rauch と D. Wigner の結果を一般のアフィン対称空間 G/H に拡張して考え、 J. Rauch と D. Wigner らの得た十分条件(1)～(4)を示すことによって次の結果を得た。

G を中心有限な非有界連結実半準純リーベー群で、 G/H をアフィン対称空間とし、 P を G/H 上の pseudo-laplacian とするとき、微分方程式 (*) は大域的な C^∞ 解をもつ。

§1. Notation and Preliminaries

G を中心有限な非有界実半準純リーベー群とし、 σ を G の involutive automorphism とする。 $G_\sigma = \{g \in G; \sigma(g) = g\}$ とおく、 $(G_0)_0$ を G_0 の単位元を含む連結成分とする。 $(G_0)_0 \subset H \subset G_0$ を満たす G の閉部分群 H を固定する。 G のリー環を \mathfrak{g} とし、

\mathfrak{g} の involution σ による固有値分解で 固有値 1 に対応する空間を f , 固有値 -1 に対応する空間を θf とあります。つまり $f = \{X \in \mathfrak{g}; \sigma(X) = X\}$, $\theta f = \{X \in \mathfrak{g}; \sigma(X) = -X\}$ とかくと, f はリーブル H に対応するリー環となり, $\mathfrak{g} = f + \theta f$ は直和分解とある。 θ を \mathfrak{g} の σ と可換な involution とし, θ による Cartan 分解を $\mathfrak{g} = R + P$ とする。このとき \mathfrak{g} は次の 4 つの分部空間の直和に分解される; θR , $f R$, θP , $f P$ 。

\mathfrak{g} の基底を次の条件を満たすようにとる;

$$\underbrace{X_1, \dots, X_p}_{\theta R}, \underbrace{X_{p+1}, \dots, X_r}_{f R}, \underbrace{Y_1, \dots, Y_g}_{\theta P}, \underbrace{Y_{g+1}, \dots, Y_s}_{f P}$$

$$B(X_i, X_j) = -\delta_{ij} \quad (1 \leq i, j \leq r)$$

$$B(Y_i, Y_j) = +\delta_{ij} \quad (1 \leq i, j \leq s)$$

但し B は \mathfrak{g} の Killing 形式とする。

G のカシミール C はこれらの基底で $C = -\sum_{i=1}^r X_i^2 + \sum_{j=1}^s Y_j^2$ と表わされる。 $X \in \mathfrak{g}$ に対し $(X^* f)(gh) = \frac{d}{dt} f(e^{tx} gh)|_{t=0}$ と定義する ($f \in C^\infty(G/H)$) ことによつて \mathfrak{g} の元はアフィン形式空間 G/H の一階の微分作用素を定義する。この定義を \mathfrak{g} の展開環 $\mathcal{R}(\mathfrak{g}_C)$ に拡張することによって カシミール C を G/H 上の微分作用素と考えることができるが、よく知られているようにこの微分作用素は G/H の pseudo-laplacian となる。

さて G/H 上の接ベクトル束 $T(G/H)$ の構造をわかりやすく

するためには次の同型対応を考える。

$$\begin{array}{ccccc} \mathcal{G} & \xrightarrow{\sim} & T_{eH}(G/H) & \xrightarrow{\sim} & T_{xH}(G/H) \\ \downarrow & & \downarrow & & \downarrow \\ X & \longrightarrow & D_X & \longrightarrow & (L_x)_* D_X \end{array}$$

但し $D_X f = \frac{d}{dt} f(e^{tX} H) |_{t=0}$, $L_x(gH) = xgH$

更に $G \times \mathcal{G} \ni (x, X) \longmapsto (xH, (L_x)_* D_X) \in T(G/H)$

となる写像を考えると, $(xH, (L_x)_* D_X) = (yH, (L_y)_* D_Y)$ であるための必要十分条件は $\exists h \in H \quad y = xh, Y = Ad(h^{-1})X$

である。従って $G \times \mathcal{G} / \sim \ni (x, X), (y, Y) \mapsto$

$$(x, X) \sim (y, Y) \stackrel{\text{def}}{\iff} y = xh, Y = Ad(h^{-1})X$$

と定義すれば,

$$G \times \mathcal{G} / \sim \xrightarrow{\sim} T(G/H)$$

である。以後 $G \times \mathcal{G} / \sim$ を記号 $G \times \mathcal{G}_H^*$ で書む。

\mathcal{G} の dual space を \mathcal{G}^* で書むと, $T^*(G/H)$ に対して 同様の議論を行う。

$$\begin{array}{ccccc} \mathcal{G}^* & \xrightarrow{\sim} & T_{eH}^*(G/H) & \xrightarrow{\sim} & T_{xH}^*(G/H) \\ \downarrow & & \downarrow & & \downarrow \\ \lambda & \longrightarrow & \xi_\lambda & \longrightarrow & (L_x^*)^{-1} \xi_\lambda \end{array}$$

但し $\xi_\lambda(D) = \lambda(X_D)$, $(Df = \frac{d}{dt} f(e^{tX_D} H) |_{t=0}) \Leftrightarrow X_D \in \mathcal{G}$

更に $G \times \mathcal{G}^* \ni (x, \lambda) \longmapsto (xH, (L_x^*)^{-1} \xi_\lambda) \in T^*(G/H)$

となる写像を考えると $(xH, (L_x^*)^{-1} \xi_\lambda) = (yH, (L_y^*)^{-1} \xi_\mu)$ であるため

<5>

の必要十分条件は $\exists h \in H, y = xh, \mu = h^{-1}\lambda$ ($\text{即ち } h\lambda(x) = \lambda(\text{Ad}(h)x)$)

である。従って $G \times_{H^*}^* \ni (x, \lambda), (y, \mu)$ に対し

$$(x, \lambda) \sim (y, \mu) \stackrel{\text{def}}{\iff} y = xh, \mu = h^{-1}\lambda$$

と定義すれば

$$G \times_{H^*}^* / \sim \cong T^*(G/H)$$

である。以後 $G \times_{H^*}^* / \sim$ を記号 $G \times_H^{*}$ で表わす。

M を C^∞ -多様体とし, T^*M 上の vector field 全体を $\mathcal{X}(T^*M)$, T^*M 上の 1-form 全体を $\Omega^1(T^*M)$ で表わすと, 次の同型が成り立つ;

$$\begin{array}{ccc} \mathcal{X}(T^*M) & \xrightarrow{\sim} & \Omega^1(T^*M) \\ \downarrow & & \downarrow \\ X & \longmapsto & i(X)\Omega \quad (\Omega = d\theta) \end{array}$$

但し $\theta \in \Omega^1(T^*M)$ は次の通りで定められる; 各 $r \in T_r^*M$ に対し, $\Theta_r(v) = \langle r, \pi_r^* v \rangle$ ($v \in T_r(T^*M)$). ここに π_r は T^*M から M 上への自然な射影とする。 f を T^*M 上の C^∞ 関数とすると, $df \in \Omega^1(T^*M)$ に対し上の同型で対応する T^*M 上の vector field を H_f で表わし, これを f に対する Hamiltonian vector field と呼ぶ。

§ 2. Pseudo-laplacian の principal symbol は対応する Hamiltonian vector field

アフィン対称空間上の Pseudo-laplacian は \mathfrak{g} 上のカミー-レ

<6>

だから得られるから同じ記号 C^* 、又その principal symbol を C^* で表わすことにする。principal symbol C は $T^*(G/H)$ 上の C^∞ 開数で、局所座標系で表されれば、簡単に

$$C(xH, \xi) = - \sum_{i=1}^r \langle (X_i^*)_{xH}, \xi \rangle^2 + \sum_{j=1}^s \langle (Y_j^*)_{xH}, \xi \rangle^2.$$

であることがわかる。但し X_i, Y_j は \mathcal{G} の \mathfrak{g} 1 で決められた基底である。カシミール $C \neq \mathcal{U}(g_C)$ の Center の元である α' は、

$$\text{Ad}(x) 不変より, C = - \sum_{i=1}^r X_i^2 + \sum_{j=1}^s Y_j^2 = - \sum_{i=1}^r (xX_i)^2 + \sum_{j=1}^s (xY_j)^2$$

となる。(但し $xX \mapsto \text{Ad}(x)X$ を表す。以後簡単のために Ad を省く。) 従って, $G \times g^*$ の支 (x, λ) を含む同値類を $[(x, \lambda)]$ で表すと、

$$\begin{aligned} C(xH, \xi) &= - \sum_{i=1}^r \langle (xX_i)_{xH}^*, \xi \rangle^2 + \sum_{j=1}^s \langle (xY_j)_{xH}^*, \xi \rangle^2 \\ &= - \sum_{i=1}^r \langle (L_x)_* D_{X_i}, \xi \rangle^2 + \sum_{j=1}^s \langle (L_x)_* D_{Y_j}, \xi \rangle^2 \\ &= - \sum_{i=1}^r \langle (L_x)_* D_{X_i}, \xi \rangle^2 + \sum_{j=1}^s \langle (L_x)_* D_{Y_j}, \xi \rangle^2 \end{aligned}$$

$$\text{すり, } C([(x, \lambda)]) = - \sum_{i=1}^r \langle (L_x)_* D_{X_i}, (L_x^*)^{-1} \xi_\lambda \rangle^2 + \sum_{j=1}^s \langle (L_x)_* D_{Y_j}, (L_x^*)^{-1} \xi_\lambda \rangle^2$$

$$\text{となる} \alpha'': L_x^{-1} \xi_\lambda ((L_x)_* D_X) = \xi_\lambda ((L_x^{-1})_* (L_x)_* D_X) = \xi_\lambda (D_X) = \lambda(X)$$

すり,

$$C([x, \lambda]) = - \sum_{i=1}^r \lambda(X_i)^2 + \sum_{j=1}^s \lambda(Y_j)^2$$

を得る。以後 $G \times g^*$ から $G \times g^*$ への自然な射影を P で表す。

$$X \in \mathfrak{g} \text{ に対し, } (\tilde{X} f)(x, \lambda) = \frac{d}{dt} f(x e^{tX}, \lambda) / t=0 \quad (f \in C^\infty(G \times g^*))$$

と定義することにすり、 $G \times g^*$ 上の vector field \tilde{X} が定まる。

$$\tilde{H}_{(x, \lambda)} = 2 \sum_{i=1}^r \lambda(X_i) \tilde{X}_i - 2 \sum_{j=1}^s \lambda(Y_j) \tilde{Y}_j$$

$\langle 7 \rangle$

と定義すると \tilde{H} は $G \times g^*$ の vector field となるが、カミールの G -不変性から $\sum_{i=1}^P (hX_i)^2 - \sum_{j=1}^g (hY_j)^2 = \sum_{i=1}^P X_i^2 - \sum_{j=1}^g Y_j^2$ (KCH)

となり、各 $\lambda \in g^*$ は $\sum_{i=1}^P \lambda(hX_i) \tilde{h}X_i - \sum_{j=1}^g \lambda(hY_j) \tilde{h}Y_j = \sum_{i=1}^P \lambda(X_i) \tilde{X}_i - \sum_{j=1}^g \lambda(Y_j) \tilde{Y}_j$ つまり \tilde{H} が成り立つ。vector field \tilde{H} は $H_{(\alpha, \lambda)} = H_{(\alpha, \lambda, \nu)}$ である。従って $(P_*)_{(\alpha, \lambda)}(\tilde{H})$ は $T(G/H)$ 上の vector field となる。この vector field $(P_*)_{(\alpha, \lambda)}(\tilde{H}) = H_{(\alpha, \lambda, \nu)}$ pseudo-laplacian の principal symbol C は \tilde{H} が成り立つ 3 Hamiltonian vector field であることをこの節で示そう。そのためには次の 2 つの lemma が必要である。

Lemma 1. P^* を $\Omega^2(G \times g^*)$ の $\Omega^1(G \times g^*)$ への自然な射影とすると次の等式が成り立つ。

$$(i) (P^*\theta)_{(\alpha, \lambda)}(\tilde{X}) = \begin{cases} \lambda(X) & (X \in g) \\ 0 & (X \in f) \end{cases}$$

$$(ii) (P^*\theta)_{(\alpha, \lambda)}(\tilde{H}) = 2 \sum_{i=1}^P \lambda(X_i)^2 - 2 \sum_{j=1}^g \lambda(Y_j)^2$$

$$(iii) (P^*\theta)_{(\alpha, \lambda)}(\partial_\nu) = 0 \text{ 但し } (\partial_\nu f)(x, \lambda) = \frac{df}{dt}(x, \lambda + t\nu)|_{t=0}$$

$$(iv) (P^*\theta)_{(\alpha, \lambda)}([\tilde{H}, \tilde{X}]) = 0 \quad (\forall X \in g)$$

$$(v) (P^*\theta)_{(\alpha, \lambda)}([\tilde{H}, \partial_\nu]) = -2 \sum_{i=1}^P \lambda(X_i) \nu(X_i) + 2 \sum_{j=1}^g \lambda(Y_j) \nu(Y_j)$$

$$(vi) (\partial_\nu)_{(\alpha, \lambda)}((P^*\theta)(\tilde{H})) = 4 \sum_{i=1}^P \lambda(X_i) \nu(X_i) - 4 \sum_{j=1}^g \lambda(Y_j) \nu(Y_j)$$

但し θ は $\Omega^1(G \times g^*) \cong \Omega^1(T^*(G/H))$ の canonical 1-form である。 $(\delta, 1)$ 定義を手えてある。

Lemma 2. \mathcal{R} の等式が成り立つ。

$$(i) (P^*_i(H)\Omega)_{(x,\lambda)}(\tilde{X}) = 0 \quad \forall X \in \mathcal{F}$$

$$(ii) (P^*_i(H)\Omega)_{(x,\lambda)}(\partial_\nu) = -2 \sum_{i=1}^p \lambda(X_i) \nu(X_i) + 2 \sum_{j=1}^q \lambda(Y_j) \nu(Y_j)$$

\langle Lemma 1 の証明 \rangle

π を $T^*(G/H)$ から G/H への自然な射影とする。 θ の定義より

$$(P^*\theta)_{(x,\lambda)}(v) = \theta_{P(x,\lambda)}(P_*v) = \langle P(x,\lambda), \pi_*P_*v \rangle$$

$$= \langle \langle x^{-1}\xi_x, \pi_*P_*v \rangle \rangle \quad \forall v \in T_{(x,\lambda)}(Gx^*)$$

が成り立つ。

(i) の証明 ; $(\pi_*P_*\tilde{X})_{xH}(f) = \tilde{X}_{(x,\lambda)}(f \circ \pi \circ P) = \frac{d}{dt} f(xe^{tX}H)|_{t=0}$ 。
がる $X \in \mathcal{F}$ とすると $\pi_*P_*\tilde{X} = 0$ 。又 $X \in \mathcal{G}$ とすると
 $\pi_*P_*\tilde{X} = \langle x \rangle_*D_x$ となり, $(P^*\theta)_{(x,\lambda)}(\tilde{X}) = \langle \langle x^{-1}\xi_x, \langle x \rangle_*D_x \rangle \rangle$
 $= \langle \xi_x, D_x \rangle = \lambda(X)$ となる。

$$(ii) \text{ の証明} ; (\pi_*P_*(\tilde{H}))_{xH}(f) = \tilde{H}_{(x,\lambda)}(f \circ \pi \circ P)$$

$$= 2 \sum_{i=1}^p \lambda(X_i) \frac{d}{dt} f(xe^{tx}H)|_{t=0} - 2 \sum_{j=1}^q \lambda(Y_j) \frac{d}{dt} f(xe^{tY}H)|_{t=0}$$

$$\therefore (\pi_*P_*)(_{(x,\lambda)}(\tilde{H}) = 2 \sum \lambda(X_i) \langle x \rangle_*D_x - 2 \sum \lambda(Y_j) \langle x \rangle_*D_y$$

$$\therefore (P^*\theta)_{(x,\lambda)}(\tilde{H}) = 2 \sum \lambda(X_i)^2 - 2 \sum \lambda(Y_j)^2$$

$$(iii) \text{ の証明} ; \pi_*P_*\partial_\nu = 0 \text{ が成り立つ}.$$

$$(iv) \text{ の証明} ; [\tilde{H}, \tilde{X}] = 2 \sum \lambda(X_i) [\tilde{X}_i, \tilde{X}] - 2 \sum \lambda(Y_j) [\tilde{Y}_j, \tilde{X}]$$

$$X \in \mathcal{G} \text{ のとき } [\tilde{X}_i, \tilde{X}] = \widetilde{[X_i, X]} \text{ で } [X_i, X] \in \mathcal{F}, \pi_*P_*\widetilde{f} = 0$$

$$\text{がる } \pi_*P_*[\tilde{X}_i, \tilde{X}] = 0 \text{ 同様に } \pi_*P_*[\tilde{Y}_j, \tilde{X}] = 0 \therefore (P^*\theta)_{(x,\lambda)}([\tilde{H}, \tilde{X}]) = 0$$

$\langle 9 \rangle$

$X \in f$ のとき, $[X_i, X] \in g^*$, $[Y_j, X] \in g^* \Delta'$.

$$(P^* \theta)_{(\alpha, \lambda)} ([\tilde{H}, X]) = 2 \sum_i \lambda(X_i) \lambda([X_i, X]) - 2 \sum_j \lambda(Y_j) \lambda([Y_j, X])$$

上の等式の右辺は g_C^* の Symmetric algebra $S(g_C^*)$ の元 $\sum_i X_i [X_i, X]$

$\rightarrow \sum Y_j [Y_j, X]$ を g^* 上の polynomial function として $\forall x \in g^*$

での値と見ることでよいとする。 $S(g_C^*)$ の元 $\sum_i X_i [X_i, X] - \sum_j Y_j [Y_j, X]$

If Symmetrization $f = \frac{1}{2} [\sum_i X_i^2 - \sum_j Y_j^2, X]$ に

$$\text{移る。 } C_f = - \sum_{i=p+1}^s X_i^2 + \sum_{j=p+1}^s Y_j^2 \text{ とおくと } \left[\sum_{i=1}^p X_i^2 - \sum_{j=1}^q Y_j^2, X \right] =$$

$[-(C - C_f), X]$ で C_f は algebra f の $\alpha \geq -1$ と

$$\therefore X \in f \Rightarrow [-(\mathcal{C} - C_f), X] = 0 \therefore \frac{1}{2} \left[\sum_{i=1}^p X_i^2 - \sum_{j=1}^q Y_j^2, X \right] = 0$$

λ は linear な子集である $\sum_i X_i [X_i, X] - \sum_j Y_j [Y_j, X] = 0$.

従って $(P^* \theta)_{(\alpha, \lambda)} ([\tilde{H}, X]) = 0$ となる。

$$(i) \text{ の証明; } [\tilde{H}, \partial_\nu] = [2 \sum_i \lambda(X_i) \tilde{X}_i - 2 \sum_j \lambda(Y_j) \tilde{Y}_j, \partial_\nu]$$

$$= -2 \sum_i \partial_\nu(\lambda(X_i)) \tilde{X}_i + 2 \sum_j \partial_\nu(\lambda(Y_j)) \tilde{Y}_j$$

$$= -2 \sum_i \nu(X_i) \tilde{X}_i + 2 \sum_j \nu(Y_j) \tilde{Y}_j$$

$$\therefore (P^* \theta)_{(\alpha, \lambda)} ([\tilde{H}, \partial_\nu]) = -2 \sum_i \lambda(X_i) \nu(X_i) + 2 \sum_j \lambda(Y_j) \nu(Y_j)$$

$$(vi) \text{ の証明; } (ii) \text{ および } (P^* \theta)_{(\alpha, \lambda)} (\tilde{H}) = 2 \sum_i \lambda(X_i)^2 - 2 \sum_j \lambda(Y_j)^2$$

$$((\lambda + t\nu)(X))^2 = \lambda(X)^2 + 2t\lambda(X)\nu(X) + t^2\nu(X)^2 \text{ で } (vi) \text{ となる。}$$

q.e.d.

< Lemma 2 の証明 >

$$\forall v \in T_{(\alpha, \lambda)} (G \times g^*) \text{ に対して } (P^* i^*(H) \lrcorner \Omega)_{(\alpha, \lambda)} (v) = (i^*(H) \lrcorner)_{P(\alpha, \lambda)} (P_* v)$$

$$= \Omega_{P(\alpha, \lambda)} (H_{P(\alpha, \lambda)}, P_* v) = (P^* \lrcorner \Omega)_{(\alpha, \lambda)} (\tilde{H}, v) = (d(P^* \theta))_{(\alpha, \lambda)} (\tilde{H}, v)$$

< 10 >

$$= \tilde{H}_{(x,y)}((p^*\phi)(v)) - \mathcal{V}_{(x,y)}((\phi^*\phi)(H)) - (P^*\phi)_{(x,y)}([H, v])$$

$$(d\omega(X, Y) = X(\omega(Y)) - Y(\omega(X)) - \omega([X, Y]) \text{ と })$$

となり、Lemma 1 および Lemma 2 をえる。

q.e.d.

さて $p^*: \Omega'(G \times g^*) \rightarrow \Omega'(G \times g^*)$ は injective で

および $i^*(H)\Omega = dC$ を示すためには $P_i^*i^*(H)\Omega = P_i^*dC$ を示す

ことである。 $P_i^*dC = d(Cop)$ で $(Cop)(x, y) = -\sum \lambda(x_i)^2 + \sum \lambda(y_j)^2$

である。 g^* 上の函数 λ_i は $\lambda_i(\lambda) = \lambda(X_i)$ ($1 \leq i \leq p$)

$\lambda_j(\lambda) = \lambda(Y_{j-p})$ ($p+1 \leq j \leq p+q$) と定義すると

$$P_i^*dC = -2 \sum \lambda(X_i) d\lambda_i + 2 \sum \lambda(Y_j) d\lambda_{j+p}$$

より、 $X \in g$ とするとき $(P_i^*dC)(X) = 0$ 。又 $(d\lambda_i)(\partial_\nu) = \partial_\nu(\lambda_i)$

$$= \nu(X_i) \text{ である} \quad (P_i^*dC)(\partial_\nu) = -2 \sum \lambda(X_i) \nu(X_i) + 2 \sum \lambda(Y_j) \nu(Y_j)$$

$\tilde{X}_{(x,y)}(X \in g)$, $\partial_\nu (\nu \in g^*)$ は $T_{(x,y)}(G \times g^*)$ を

生成するからこの Proposition をえる。

Proposition $T^*(G/H)$ 上の vector field $H = P_* \tilde{H}$ は pseudo-laplacian C の principal symbol C は \exists ある \exists Hamilton vector field である。

§ 3. Pseudo-laplacian の大域的可解性

さて我々は § 0 に述べた J. Rauch と D. Wigner の得た可解であるための十分条件 (1) ~ (4) が $M = G/H$ と $L, P = C$ としたとき成り立つことをこの節で証明しよう。

$\langle(1)\text{の証明}\rangle$ pseudo-laplacian C の principal symbol C は
 $\S 2$ で計算したとおり $- \sum_{i=1}^p \lambda(x_i)^2 + \sum_{j=1}^q \lambda(y_j)^2$ であることを
 λ が real であることは明らかである。 $t_C = C$ を示す。

X のためには、 $\varphi, \psi \in C_c^\infty(G/H)$ に付し

$$(\varphi, \psi) = \int_{G/H} \varphi(gH) \psi(gH) dg_H$$

(以上 dg_H は G/H 上の G -invariant measure である)

と定義すると、 $(C\varphi, \psi) = (\varphi, C\psi)$ $\forall \varphi, \psi \in C_c^\infty(G/H)$
 を示せばよい。 $X \in \mathfrak{g}$ に付し、簡単な計算によれば、

$$(X^*\varphi, \psi) = -(\varphi, X^*\psi)$$

であるから、 \mathfrak{g} のカシミール $C = - \sum_{i=1}^p x_i^2 + \sum_{j=1}^q y_j^2$ である
 $\therefore (C\varphi, \psi) = (\varphi, C\psi)$ $\forall \varphi, \psi \in C_c^\infty(G/H)$ である。q.e.d.

$\langle(2)\text{の証明}\rangle$

$\S 2$ の Proposition から簡単な計算によれば、 $\exists [x, \lambda] \in G \times \mathfrak{g}^* \cong T^*(G/H)$ を通る Hamiltonian vector field H の積分
 曲線は $P(t) = [(x e^{2t(\sum \lambda_i x_i)} x_i - \sum \lambda_j (y_j), \lambda)]$ ($t \in \mathbb{R}$)
 である。曲線 $P(t)$ の G/H 上への projection は $\gamma(t)$ となる
 とすると、 $\gamma(t) = (\pi \circ P)(t) = x e^{2t(\sum \lambda_i x_i - \sum \lambda_j y_j)} H$
 である。 $C([x, \lambda]) = 0$ $\lambda \neq 0$ であるときを通る曲線の G/H 上への
 projection は $\gamma_0(t) = x_0 e^{2t(\sum \lambda_0 x_i - \sum \lambda_0 y_j)} H$ である。
 この曲線の非有界性を示すには、 x_0 が単位元である場合を示す。
 せばよい。たとえ eH を通る曲線 $e^{2t(\sum \lambda_0 x_i - \sum \lambda_0 y_j)} H$ ($t \in \mathbb{R}$)

$\langle 12 \rangle$

もし $\forall j$ ($1 \leq j \leq g$) に対して $\lambda_0(y_j) = 0$ とすると, $C((x_0, \xi_0)) = 0$
 $\Rightarrow -\sum_{i=1}^p \lambda_0(x_i)^2 + \sum_{j=1}^g \lambda_0(y_j)^2 = 0$ となり $\forall i$ ($1 \leq i \leq p$) に対して
 $\lambda_0(x_i) = 0$ の $\lambda_0 = 0$ となる $\lambda_0 \neq 0$ は矛盾である。従って
 $\sum \lambda_0(x_i)x_i - \sum \lambda_0(y_j)y_j$ は零でない $\in \mathbb{R}^p$ の元が存在する。
> 曲線 $e^{2t(\sum \lambda_0(x_i)x_i - \sum \lambda_0(y_j)y_j)}$ H は必ず有理である。 q.e.d.

<(3)の証明>

(3)と(4)の証明は Hörmander [3] の Th. 7.3 が本質的であるので定理を述べる。

Theorem (Hörmander)

X は analytic 多様体, $P \in X$ 上の analytic 係数の微分作用素と L real principal symbol $P_m \in \mathcal{S}$ とする。 $u \in X$ 上の distribution とするとき $\{(x, \xi) \in WF_A(u); (x, \xi) \notin WF_A(Pu), \frac{\partial P_m}{\partial \xi} \neq 0\}$
 は P_m の Hamiltonian vector field $\tilde{\gamma}$ invariant である。
 (すなはち $WF_A(u)$ は X 上の analytic 因子を modulo $\tilde{\gamma}$ -wave front set である。)

さて G/H は analytic 多様体であり, C は analytic 係数の real symbol $C \in \mathcal{S}$ 。更に $T^*(G/H)$ に座標近傍系を入れて計算すれば $\tilde{\gamma}$ は $\xi \neq 0$ かつ $\frac{\partial C}{\partial \xi} \neq 0$ である。
 上の定理が適当である。今 $u \in C^\infty(G/H)'$ で $Cu = 0$ とする。もし $WF_A(u)$ の元 (x_0, ξ_0) が存在したとすると, (x_0, ξ_0) を通り Hamiltonian vector field の積分曲線 $P(t)$ は常に $WF_A(u)$

<13>

にある。ところが(2)により $\Gamma(t)$ ($t \in \mathbb{R}$) は非有界であるから
 $u \in C^\infty(G/H)'_0$ に矛盾する。故に $WF_A(u) = \emptyset$ となり u は至
るところ analytic であり, G/H は連結非有界で $u \in C^\infty(G/H)'_0$
 $u = 0$ が示される。

g. e. d.

<(4)の証明>

$G/H \supset \forall \Gamma$ compact に対して次の条件をみたすように
 G/H の compact set $\hat{\Gamma}$ をとる。

① $\Gamma \subset \text{Int } \hat{\Gamma}$ ② $G/H - \hat{\Gamma}$ のどの connected comp-
onent が非有界。(もし $G/H - \hat{\Gamma}$ の connected component で有
界なものがあれば、それを含むように改めて $\hat{\Gamma}$ をとり直せ
ばよい。)

この $\hat{\Gamma}$ に対して $G/H - \hat{\Gamma}$ で(3)と同様の議論を行なうと
 $G/H - \hat{\Gamma}$ 上で u は analytic となり, ②から $G/H - \hat{\Gamma}$ 上で
 $u = 0$ となる。従って $\text{Supp } u \subset \hat{\Gamma}$

g. e. d.

かくして我々は次の定理を得る。

Theorem. G/H を連結非有界なアフィン対称空間 (G の
中心は有限) とし, $\mathcal{C} \in G/H$ 上の pseudo-laplacian とする
とき. 射像 $\mathcal{C} : C^\infty(G/H) \longrightarrow C^\infty(G/H)$ は onto で
ある。

References

- [1] A. Cérézo and F. Rouvière ; Operateurs différentiels invariants sur un groupe de Lie. École Polytechnique Paris (1972)
- [2] S. Helgason ; The surjectivity of invariant differential operators on symmetric spaces I, Annals of Mathematics vol 98 (1973)
- [3] Hörmander ; Uniqueness Theorems and Wave front Sets for Solutions of Linear Differential Equations with Analytic Coefficients , Comm. Pure Appl. Math, 24 (1971)
- [4] J. Rouch and D. Wigner ; Global solvability of the Casimir operator , Annals of Math, 103 (1976)